V02D00 L:CHUOHY13 1 78/04/07/09:53:08 中央高野球見本
P:KATA G:GIN J:CHUOHY 机：片田 パ：見本組

第２節　台頭期（昭和48年～54年、９期～15期）

１．この期の背景

ある日突然、スーパーの店頭からトイレットペーパーが消えた。48年秋、第４次中東戦争勃発による「オイルショック」は日本中に危機的なモノ不足を引き起こし、国民を大パニックに陥れた。また、証人喚問での「記憶にございません」や「ピーナッツ100個受け取り」が流行語にまでなり、田中角栄元首相逮捕にまで到った戦後最大の収賄事件「ロッキード擬獄」、と大きな出来事が続いた。

スホーツ界では、巨人の９連覇は終焉の時をむかえ、「国民的ヒーロー」長嶋茂雄は惜しまれながら現役を引退、一方で怪物の名をほしいままに甲子園、神宮を席巻した江川卓投手（作新学院―法大）は53年のドラフトで「空白の１日」というドラフト破りをやってのけ世間の大顰蹙を買い一転「ダーティヒーロー」へ凋落。漫才のビートたけし氏のネタに登場する「コマネチ」ことナディアコマネチが10点満点を連発したモントリオール五輪も、この時代である。

中央高校も、節目の10周年を迎え、１学級増により南校舎を新たに増築、手狭になった校庭も南側にせり出すように拡張、野球部のグラウンドも現在の場所に移る事となった。工事中は練習試合が全くできない状態で、必然的に他校、特に県外の学校に出向き胸を借りる事が多くなった。結果からすると、これが福に転じる。甲子園出場時の青い横断幕に書かれた「燃えよ！中央」は51年に赴任された関口登第★代校長先生のキャッチフレーズである。

決して恵まれた環境ではなかったが、この時代の野球部の活躍は「中央」の名を県高校野球界やファンに知らしめ、次なる時代への確固たる架け橋となった。

48年は、３年生が投手で主将の大塚候一１人にもかかわらず１年生投手、高橋幸雄の台頭などで３回戦進出。優勝候補の高崎商に４―５で惜敗するも、１・２回戦を突破し加盟後初の２勝をあげた。

49年は準々決勝でこの年代表となり甲子園でベスト４まで勝ち進んだ前橋工に０―６で完敗するが、前年を上回る３勝をあげ初のベスト８入り、強豪校の１校に名乗りをあげた。能力的にすぐれた選手がそろっていた事もあるが、旧チームからそっくりそのままのメンバーという経験、そしてこの年から組み始めた県外チームとの数多くの練習試合で培われた自信がこの大会で花開いた。

50年は、さらにその上を行く。準決勝（当時の県代表決定戦）で同じ新興勢力の樹徳に１―２で敗れ甲子園への道を閉ざされるが初のベスト４進出は大いに賞賛された。特に、前日の準々決勝では「名門復活」を掲げ、第２シードとはいえ優勝候補の最右翼と前評判の高かった桐生を延長13回の激闘の末破り、県内高校野球ファンをアッと言わせた。この快進撃が決してまぐれではない証拠に、このチームは前年の秋（49年）の新人戦でも

V02D00 L:CHUOHY13 2 78/04/07/09:53:08 中央高野球見本

準優勝を果たしている。この頃の関東大会は各県の優勝チームのみ（開催県は２校）で行われていたため初の関東大会出場はならなかったが、決勝までの４試合を相手に１点ずつしか許さない安定した投手力と派出さはないがつながりの良い打線、２試合に逆転勝ち、特に準決勝では延長16回の熱戦の末に古豪、前橋を破った粘り強い試合運びが評価され、選抜大会への県推薦校に選出されている。

ただ、この後の４年間は苦戦が続く。特に３年間エースとして君臨した高橋投手の穴がうまらない。そして立ちふさがる古豪・強豪校の高く厚い壁……。

51年は公式戦に３人の投手が登板するが、秋・春・夏とも初戦敗退。春と夏は共に好投手擁する富岡に２試合とも完封負けの屈辱を味わった。前年のベスト４のメンバーが３人残り期待が大きかったが、結果が残せなかった。

52年も投手力に課題が残ったが、１年生投手、高柳和浩の加入で投手陣に厚みが増し、バランスの良いチームに仕上がった。夏は強打ぶりを発揮し、初戦を難無く突破するが、２回戦でこの年の代表校、高崎商に２―13と完敗。しかし、組み合わせ次第では、もう少し上位に勝ち上っても不思議ではなかったと思える程のチームの完成度は高かった。

53年夏は、この年の春の選抜大会で史上初の完全試合を達成した松本稔投手拗する前橋と３回戦うーで対戦。初回、守備の乱れから大量４失点。以降は互角に渡りあったが、打線は「完全男」松本の前に完全に沈黙。０―５の完敗であった。全体的に小粒で、レギュラーに下級生も多く「多くは望めない」といわれた年であっが、初戦（２回戦）を延長戦の末突破この試合も粘り強く健闘した。

54年は能力的に高い、又体格にも恵まれた選手が揃い、投攻守にバランスの取れた好チームに仕上がったと評判で、久々に上位進出が期待されたが、夏は初戦で関東学園(現関東学園大附)に０―３の完封負け。序盤のチャンスに１本が出ず、逆に相手にワンチヤンスをものにされる。という何とも悔しい敗戦となってしまった。

こうして振り返ってみると、48年～50年の３年間に比べ、後半の４年間は尻つぼみの感は否めない。じゃあ弱かったのか？といえばそんなことは決してない。すぐれた選手もたくさんいたし、練習量だって相当多かった。しかし、実力云々を言う前に、富岡、高商、前高、関学という県内を代表する有力校と早々と対戦してしまったというクジ運のなさもあったにせよ。これら強豪チームの「名前」や「伝統」の力の前に試合する前から尻ごみしてしまったという事も確かである。

創部10年を超え、県高校野球界に頭角を現し、強豪校の１つに数えられるまでにはなかったが、実力をつける他にも、まだまだ乗り越えなければならない高く厚い壁がある。そんな時代であった。

次なる時代は、その高く厚い壁に敢然と立ち向かって行き、そして何か所かは、それを乗り越えた。そして、またその次なる時代へ向かって一気に加速して行く。（敬称略）

長谷川雄一（12期）

V02D00 L:CHUOHY13 3 78/04/07/09:53:08 中央高野球見本

昭和51年　（12期）

当時の資料が手元にあるわけではないので正確ではないが、この年の大会誌で我がチームを、確かこんな風に紹介してあった。『ベスト16、ベスト８ときて昨年はベスト４、と完全に強豪校の仲間入りを果した。今年は高い総合力でその上を狙う。【投】昨年までの高橋のような大黒柱はいないが、茂木、戸沢、丸山の３人が競い合い、腕を磨いている。高い盗塁阻止率を誇る捕手・小池がそれを支える。【打】成長著しい切込み隊長・中澤、昨年も４番の平島らベスト４メンバーを中心に攻撃力は高く、昨年を上回る』…と。「本当かよ？」皆が思ったはず。「ずいぶん持上げてくれたな」とも。自分の様な下手っくそがこう言うと同期のメンバーから非難を浴びようものだが、敢えて言う。この年代（昭和48年～54年）のなかでは一番弱かった、と。

桐生戦決勝タイムリーの新主将・小池正晃、打率よりもいい場面で結果を出した４番・平島敏幸、下位ながらも高い打率を残した野中弘、と前年夏の経験者のほかに「新チームになって一番伸びた。」と今井輝次監督絶賛の中澤守や中学野球で活躍した田村考也・高野茂（共に13期、当時２年）の打線は、旧チームと比較してもそれ程見劣りするものではなかった。しかし、高橋幸雄投手（11期）の存在は大きすぎた。その穴が最後まで埋まらない。

結局、公式戦は秋（高崎商、１－８、７回コールド）、春（富岡、０－７、７回コールド）、夏（富岡、０－３）と全て初戦で敗退。春の大会後には、投手陣の底上げを図るため、先の小池・平島の強肩２人とバッティング投手をさせると「うちのなかでは一番投手らしいボールを投げる」（今井監督談）、外野手の野中を投手に転向させる案が浮上したり、我々が引退した後に退部した１年生投手が主戦格となるなど投手力不足は深刻であった。

秋は、長谷川雄一３塁手の拙い守備から投手の茂木俊哉が捕まり、集中打を浴びた。それでも、６回投げて17本の長短打を浴びながらも終盤の８失点だけというのは、彼らしいといえば彼らしい。

春は、当時県内一といわれた富岡の大須賀投手に打線が沈黙、投手陣も踏ん張りきれずに完敗。再戦となった夏も、春打ち込まれた戸沢弘和（当時２年）が、大須賀に負けぬ力投をみせたが、打線の援助なく、またしても敗れ去った。

富岡には、前年秋の西毛リーグで広木（元ロッテ）にやられ、夏前の練習試合でも大敗しており、力の差があった、と認めざるを得ない。

前年チームの活躍のおかげで、春先から県外強豪校との練習試合が多かった。甲子園ベスト４の上尾、古豪・熊谷商のレベルの高い埼玉勢や、上田・松代・長野工といった長野県でも常に上位に食い込んでくる学校との試合では、得る物も多かったがほとんどが大敗であった。特に、恒例となっていた松代との試合では投手陣が中盤に７連続２塁打を浴びるなどで、１―17の完敗。翌日は、長野工にも歯が立たなかった。

夏直前の上武一（廃校）との試合では、立川明（当時２年）が右手人差し指を骨

V02D00 L:CHUOHY13 4 78/04/07/09:53:08 中央高野球見本

折して戦線離脱。練習試合でも負けが込んでいることもありチームの士気は上がらなかった。何とかその沈滞ムードを変えようと（？）登場したのが部の歴史の中でも珍しい、胸にローマ字で『CHUO』の４文字のユニフォーム。しかし、本番で前述の結果の上、再びこれを着て望んだ新チームも秋の大会の初戦で敗退、ということで、あえなく「御役御免」。その後も陽の目を見る事はなかった。



珍しいローマ字のユニフォームで試合前のあいさつ。が、最初で最後のお披露目となった。

「燃えよ！中央」のスローガンを掲げた、関口登第〇代校長先生（元県高野連理事長）が赴任され、拡張なった校庭で野球部のグラウンドが現在の場所に移ったのもこの年の春のことである。

周囲は一面田んぼで、今とは風景がだいぶ異なっていた。変わらないのは、春先の強風と、梅雨前の藁を焼く煙のすごさであろうか？野球部のグラウンドだってベンチもスコアボードも、雨天練習場なんてとんでもない、バックネットとマウンドといった現在の原型があるだけ、本当にな〜んにもなかった。ブルペンは投手陣が土盛って作ってたっけ…。全体に石ころが多くて、まめに拾ってたけど、よくイレギュラーして体は痣だらけだった。

練習試合は、この年も県外の学校と数多く組まれていたが、今のように、マイクロバスがあるわけではなく、ほとんどが高崎駅に集合して電車（それも各駅停車）で出向くためダブルヘッダーのときなどは、朝早く家を出て夜遅くに帰る、翌日はいつものとおり授業、という生活は非常にきつかったし近場の相手ならともかく、長野市内でのダブルが続くときなどは体力的に厳しかった。それだけに、ようやく自校で練習試合ができるようになったことは喜ばしいことであった。特別に柿落としみたいなことはやらなかったが、利根商、渋川、玉村といった県内の学校や県外からは長野の上田東が試合に訪れてくれたと記憶している。

世は、年明けからロッキードに明け、ロッキードに暮れた１年で、田中元首相逮捕の時などは金額の大きさに驚愕させられ、不条理な事実に憤りを覚えたものである。

初夏の頃、日曜の朝、練習試合に向かうため眠い目をこすりながらRadioのスイッチをONするとよく流れてきた曲は『ビューティフルサンデー』。その軽快なテンポに、その頃イレギュラーした打球を顔面に受けろくに食事もできずにだいぶブルーになっていた自分にとっては「ちっともビューティフルじゃねえ！！」と朝から不機嫌にさせられたものだ。

夏の甲子園では、〇巨人監督の原辰徳が主砲の「スター軍団」・東海大相模が脚光を浴びたが優勝したのは無印の「雑草

V02D00 L:CHUOHY13 5 78/04/07/09:53:08 中央高野球見本

軍団」・桜美林と何とも対照的な結末となった。

秋には、アイドル・キャンディーズの向こうを張って、後にミリオンセラーを連発する、ピンクレディーが颯爽と登場。自分などは「右の子のほうが、かわいい。」と言って「趣味悪ぃ～！」と皆からよく笑われた。

話がだいぶ横道にそれてしまったが、我々の代は２年生の夏の大会前までは８名の仲間がいたが終了後２名が退部。残った６名は年々上がっていく先輩たちの実績を自分達の代で止めてはならないと、必死に努力していた。下級生のメンバーも同じ気持ちだったはずである。
が、結果は残せなかった。何とか上位進出を！と意気込む小池主将は、組み合わせ抽選会で分の悪い富岡を引き当てた瞬間、壇上で天を見上げ絶句したそうである。

新興強豪校というレッテルや周囲の期待、前年ベスト４という実績からくるプレッシャーに苦しみ、それに耐え戦ってきたが最後には運にまでも見放されてしまった、そんな１年であった。

最後になってしまったが、平成○年から○年間、中央を率いた高崎OBの高田勉監督は同学年。
１年生の時から３番投手兼内野手として活躍した彼には、よくいい場面で痛打を浴びた、と記憶
している。　　（敬称略）

長谷川　雄一

［12期メンバー］

◎小池　正晃　　中澤　　守
　野中　　弘　　長谷川雄一
　平島（早瀬）敏幸　　茂木　俊哉

＊あいうえお順、（　　）内は現在の姓
◎印　主将

12期公式戦記録

昭和50年秋季関東大会県予選
西毛ブロック１回戦

中	央	０	０	０	０	０	０	１	１
高崎商		０	０	２	０	０	６	×	８

（バッテリー）茂木―小池

西毛ブロック１回戦

中	央	０	０	０	０	０	０	０	０
富	岡	２	０	０	１	０	４	×	７

（バッテリー）戸沢―小池

昭和51年第58回全国高校野球選手権群馬大会
１回戦

中	央	０	０	０	０	０	０	０	０
富	岡	１	２	０	０	０	０	０×	３

（バッテリー）丸山、戸沢―小池